

# 巡礼が刻む道と時

浅 川 泰 宏

- I. 日本宗教学会における巡礼研究の展開
- II. 巡礼の空間的再考—田中智彦の「発展的経路」
- III. 巡礼の時間的再考—「聖年」周期的・定期的な祝祭状況
- IV. 巡礼の「創造」とその学問的課題

## I. 日本宗教学会における巡礼研究の展開

### (1) 宗教研究(第1号～第359号)にみる巡礼研究

筆者はかつて、日本宗教学会における巡礼研究の動向を整理したことがある。日本宗教学会の機関誌、『宗教研究』の創刊号から最新号までを通読し、論文と学会大会の発表要旨を対象として、広義の巡礼研究の展開を追いかけた。その結果、①学会設立(1930(昭和5)年)から20年間に渡って巡礼研究が見られないこと、②1950年代に「民俗信仰(folk-beliefs)」という概念を通して巡礼が研究対象化されたこと、③1970年代から1990年代にかけて巡礼研究が本格化・多様化したこと、などを指摘した<sup>1)</sup>。

さらに2008年11月に、愛媛大学で開催された「第1回四国地域史研究大会」のシンポジウムでは、日本宗教学会に加え、日本民俗学会、日本文化人類学会、「宗教と社会」学会における3年間(2006～2008年度)の学会大会の動向を整理した。その結果、①2000年代には巡礼研究が爆発的に増加したこと、②と

りわけ宗教学会で巡礼研究が活発であること、③シンポジウムや共同発表のテーマとして、巡礼や聖地が注目されるようになったこと、④若手研究者の参入と丹念なフィールドワークを踏まえた調査報告の充実がみられること、などを指摘した。さらに近年の新しい分析軸として、(A) ツーリズム／文化遺産系、(B) 慰霊／ナショナリズム系、(C) ポピュラー・カルチャー系、(D) 福祉／ボランティア系が挙げられることを指摘した<sup>2)</sup>。(A)については、山中弘、木村勝彦、松井圭介による長崎の教会群と世界遺産化をめぐる研究、浅川の四国遍路の巡礼路再生運動の研究、門田岳久による沖縄の斎場御嶽の研究、對馬路人、森栗茂一の交通の研究などが、(B)については、「聖地・慰霊・宗教的ナショナリズムの再構築」をテーマとしたパネル発表を行った加藤信行、栗津賢太、平良直、西村明の研究などが、(C)については、今井信治、デール・アンドリュースのアニメの聖地巡礼の研究などが、(D)については板井正斉の伊勢神宮の参拝ボランティアの研究などがあげられる。

### (2) 宗教研究(第360号～第375号、第87巻別冊)にみる巡礼研究

前回の整理から、さらに5年間(2009～2013年度)の日本宗教学会における学会発表と論文掲載を追加したのが表1および図1である。2000年代は学会発表48件、論文掲載4

キーワード：巡礼、巡礼研究、田中智彦、聖年、ツーリズム

表1 日本宗教学会『宗教研究』（第1号－第375号）における巡礼研究リスト

| 号   | 刊年   | タイトル                                          | 著者    |
|-----|------|-----------------------------------------------|-------|
| 123 | 1950 | 民間信仰の一形態としての巡礼                                | 小池長之  |
| 127 | 1951 | 四国遍路をめぐる信仰                                    | 小池長之  |
| 137 | 1953 | 神幸と聖地                                         | 小池長之  |
| 176 | 1963 | ☆ 近世参詣の国民化―一抜参りと御蔭詣で―                         | 新城常三  |
| 186 | 1965 | 幕末期の大和の寺社詣で                                   | 金子圭助  |
| 190 | 1967 | 秩父巡礼                                          | 小池長之  |
| 214 | 1973 | 〈おみろく参り〉について―宮城県弥勒寺調査中間報告                     | 高橋 渉  |
| 214 | 1973 | 接待講における大師信仰の実態                                | 星野英紀  |
| 217 | 1974 | ☆ 四国遍路における接待の意味―有田接待講の場合―                     | 星野英紀  |
| 218 | 1974 | 「おみろく参り」について2）―弥勒寺とイタコ信仰―                     | 高橋 渉  |
| 218 | 1974 | ヨーロッパにおける巡礼について                               | 植田重雄  |
| 222 | 1975 | 信仰の地域的形態とその性格―〈おみくろ参り〉について3）―                 | 高橋 渉  |
| 222 | 1975 | 使徒聖ヤコブ巡礼の原像の考察―中世聖者伝承について―                    | 植田重雄  |
| 222 | 1975 | 昭和10年代の四国遍路                                   | 星野英紀  |
| 226 | 1976 | 四国「弥谷」信仰について                                  | 高橋 渉  |
| 230 | 1976 | 「札所」巡詣の宗教的性格について                              | 高橋 渉  |
| 234 | 1977 | 庶民信仰における〈行〉の形態と性格                             | 高橋 渉  |
| 238 | 1979 | 高群逸枝の巡礼体験について                                 | 星野英紀  |
| 241 | 1979 | ☆ 「参詣」の形態と構造                                  | 高橋 渉  |
| 242 | 1980 | 「庶民信仰」の組織化について                                | 高橋 渉  |
| 246 | 1981 | 「六道参り」の信仰形態                                   | 高橋 渉  |
| 259 | 1984 | 高野詣―特に院政期から鎌倉時代にかけて                           | 日野西眞定 |
| 259 | 1984 | ルルドの洞窟にみる祭祀空間の発生過程                            | 関 一敏  |
| 263 | 1985 | 巡礼―知多四国の場合―                                   | 中谷弘光  |
| 271 | 1987 | 西国巡礼行者集団の伝承をめぐって                              | 小嶋博巳  |
| 271 | 1987 | 熊野参詣における聖俗認識について                              | 石倉孝祐  |
| 275 | 1988 | 聖地のトポロジー―神国と浄土について―                           | 鎌田東二  |
| 275 | 1988 | 円光大師二十五霊場巡拝記の一問題                              | 山本博子  |
| 275 | 1988 | 物詣と巡礼―その宗教意識の相違―                              | 中村生雄  |
| 283 | 1990 | メッカ巡礼行事の現状―マレーシアタブンハッジ制度に関連して―                | 磯崎定基  |
| 287 | 1991 | 那智参詣曼荼羅にみえる補陀落渡海僧                             | 根井 浄  |
| 287 | 1991 | 都市生活者の参拝行動について―都市ターミナル空間における小祠祭祀―             | 村上興匡  |
| 291 | 1992 | スロヴェニア（ユーゴ北部）におけるフランシスコ・ザヴィエル巡礼地とその現状         | 河野 眞  |
| 295 | 1993 | 熊野那智参詣曼荼羅の制作者                                 | 根井 浄  |
| 295 | 1993 | 法然上人霊跡巡拝記に関する一考察                              | 山本博子  |
| 295 | 1993 | ポーランドにおける聖地巡礼<br>―ヤスナ・グーラとカルバリア・ゼブジドフスカの事例から― | 杉井純一  |
| 299 | 1994 | 聖地と共同体                                        | 平良 直  |
| 299 | 1994 | 法然上人霊跡巡拝記に見られる諸問題                             | 山本博子  |

|       |      |                                |        |
|-------|------|--------------------------------|--------|
| 299   | 1994 | 聖地ルルドの構成原理—泉・聖体・聖女の拮抗—         | 寺戸淳子   |
| 303   | 1995 | 巡礼行動としての修学旅行                   | 石倉孝祐   |
| 306   | 1995 | ☆ 聖地のスペクタクル—ルルドにおける奇蹟・聖体・傷病者—  | 寺戸淳子   |
| 307   | 1996 | 「首里十二カ所巡り」にみる宗教の重層構造           | 稲福みき子  |
| 307   | 1996 | ルルド巡礼の現在—「ルルド癌患者希望の会」同行調査を中心に— | 寺戸淳子   |
| 311   | 1997 | ルルドにおける「奇蹟」と「治癒」               | 寺戸淳子   |
| 315   | 1998 | 祭儀としての奉仕活動—ルルドの〈ホスピタリティー〉をめぐる— | 寺戸淳子   |
| 319   | 1999 | 熊野詣の精進と還向の儀から—護法のことなど—         | 鳥羽重宏   |
| 319   | 1999 | 原初的巡礼としての隔夜修行                  | 根井 淨   |
| 319   | 1999 | 苦しみの公共空間としてのルルド                | 寺戸淳子   |
| 319   | 1999 | 巡礼と癒し                          | 中山和久   |
| <hr/> |      |                                |        |
| 322   | 2000 | 熊野古道の習い                        | 根井 淨   |
| 327   | 2001 | 知的障害児巡礼の挑戦—ルルドにおける共同体イメージの多様性  | 寺戸淳子   |
| 331   | 2002 | 公共空間における「からだ」の主題化—ルルド巡礼分析—     | 寺戸淳子   |
| 331   | 2002 | 伊勢参宮習俗の現在                      | 濱千代早由美 |
| 333   | 2002 | ☆ 四国遍路八十八札所の成立                 | 松尾剛次   |
| 335   | 2003 | 遍路者接待における宗教性の位相                | 浅川泰宏   |
| 335   | 2003 | 巡礼の諸相                          | 藤原久仁子  |
| 337   | 2003 | ☆ キリストに依る世界                    | 寺戸淳子   |
| 339   | 2004 | 歓心十界曼荼羅と熊野比丘尼                  | 根井 淨   |
| 339   | 2004 | ルルド巡礼における「公共性」の展開              | 寺戸淳子   |
| 339   | 2004 | 巡礼札から見る近世の西国巡礼                 | 幡鎌一弘   |
| 341   | 2004 | ☆ 12イマーム・シーア派参詣の理論的側面          | 吉田京子   |
| 344   | 2005 | ☆ ゴロアスター教における聖地の概念             | 青木 健   |
| 347   | 2006 | 法然上人二十五霊場のミニチュア霊場              | 山本博子   |
| 347   | 2006 | 岩崎御嶽山霊神場に見る御嶽講の現在              | 小林奈央子  |
| 347   | 2006 | 七面山「うつし霊場」について                 | 望月真澄   |
| 347   | 2006 | 諸国定着の熊野比丘尼—備前国下笠加村の場合          | 根井 淨   |
| 351   | 2007 | 死者と生者の接点—民俗宗教の視点から             | 宮家 準   |
| 351   | 2007 | 死者と生者の接点—日本文化と仏教の聖地観           | 藤井正雄   |
| 351   | 2007 | 宗教とツーリズムをめぐる—                  | 山中 弘   |
| 351   | 2007 | 観光地としての江の島の展開                  | 森 悟朗   |
| 351   | 2007 | 四国遍路の今日的展開—二極化する巡礼実践           | 浅川泰宏   |
| 351   | 2007 | 観光戦略としての宗教—長崎におけるキリシタンをめぐる—    | 松井圭介   |
| 351   | 2007 | 長崎の教会群と世界遺産                    | 木村勝彦   |
| 351   | 2007 | 公開空間への私事の「現れ」—「傷病者の塗油の秘跡」改革    | 寺戸淳子   |
| 351   | 2007 | 戦犯の墓碑を支える人々—興亜観音・殉国七士の碑をめぐる—   | 加藤信行   |
| 351   | 2007 | 戦地巡礼と記憶の再構成                    | 栗津賢太   |
| 351   | 2007 | 戦争死者をめぐる無縁空間と権力空間              | 西村 明   |
| 351   | 2007 | 場所の記憶と中心性の再構築—沖縄意識の形成と観光という舞台  | 平良 直   |
| 351   | 2007 | ポピュラー・カルチャーにおける新しい共同体の構築       | 今井信治   |
| 351   | 2007 | 七面山「うつし霊場」の事例                  | 望月真澄   |
| 351   | 2007 | 伝統仏教教団における聖地形成—明治期・知恩院を事例として   | 江島尚俊   |

|     |      |                               |             |
|-----|------|-------------------------------|-------------|
| 351 | 2007 | 聖地の近代—修験霊山の表象                 | 山口正博        |
| 355 | 2008 | グラストンベリーという聖地                 | 河西瑛里子       |
| 355 | 2008 | 聖家族の足跡を辿る人々—コプト・キリスト教にみる巡礼の諸相 | 岩崎真紀        |
| 355 | 2008 | 宗教都市ヴァラナシにおける信仰               | 宮崎智絵        |
| 355 | 2008 | 近世の身延山と江戸信徒                   | 望月真澄        |
| 355 | 2008 | 旧ユーゴスラビア崩壊後における宗教の復興と聖地への巡礼   | デラコルダ・ティンカ  |
| 355 | 2008 | 歩き遍路における意識の変化と宗教的次元           | 浅川泰宏        |
| 355 | 2008 | 宗教的集合記憶のポリティクス—宗教とツーリズムの諸相    | 山中 弘        |
| 359 | 2009 | 類似宗教と擬似宗教の定義をめぐって             | 今井信治        |
| 359 | 2009 | 聖地へのアクセシビリティ—宗教観光地としての神社を事例に  | 板井正斉        |
| 359 | 2009 | 慰霊巡拝にみる霊魂観念—東部ニューギニア地域の事例から   | 中山 郁        |
| 359 | 2009 | 「隔たり」と「つなぎ」—戦地慰霊の時・空間的構成      | 西村 明        |
| 359 | 2009 | 聖地の構築—メジュゴリエを事例として            | デラコルダ・ティンカ  |
| 359 | 2009 | 現代の聖地巡礼—ツーリズムにおける場所体験の複層性     | 岡本亮輔        |
| 359 | 2009 | ヨーロッパの女神運動—イギリスとハンガリーの比較より    | 河西瑛里子       |
| 359 | 2009 | 宗教的空間構造の分析—神社の聖と俗             | 松村志眞秀       |
| 359 | 2009 | 四国遍路における地域の活性化                | 河野昌広        |
| 359 | 2009 | 「ひぐらしのなく頃に」聖地巡礼               | デール・アンドリュース |
| 359 | 2009 | ネパールの仏教寺院ブンガ・バハの宗教的空間にみられる表象  | 佐久間留理子      |
| 359 | 2009 | 分析概念としての「宗教的空間」をめぐって          | 松岡秀明        |
| 363 | 2010 | ヒンドゥー聖地と環境問題                  | 宮本久義        |
| 363 | 2010 | 現代巡礼における死の位相—スペイン・サンティアゴ巡礼の事例 | 岡本亮輔        |
| 363 | 2010 | 聖地旅行をめぐる「支え合い」の歴史—高齢者・障がい者の事例 | 板井正斉        |
| 363 | 2010 | 身延山参詣記にみる巡拝寺院について             | 望月真澄        |
| 363 | 2010 | 仏教教団と講集団の関わり—四国遍路の事例から        | 栗田英彦        |
| 363 | 2010 | 「霊場」における死者供養の具体相—秩父観音霊場を事例として | 徳野崇行        |
| 363 | 2010 | 宗教ツーリズムの生成と課題                 | 松井圭介        |
| 363 | 2010 | 宗教史跡の観光資源化—沖縄県南城市の地域振興政策を事例に  | 吉野航一        |
| 367 | 2011 | 「宗教」と「ツーリズム」に関する理論的諸問題        | 山中 弘        |
| 367 | 2011 | 宗教ツーリズムの展開と聖地の空間変容            | 松井圭介        |
| 367 | 2011 | 「セラピーツーリズム」としての現代巡礼           | 門田岳久        |
| 367 | 2011 | 巡礼ツーリズム—サンティアゴ・パス巡礼団の事例       | 岡本亮輔        |
| 367 | 2011 | 聖なる旅の真正性と商品化—長崎のカトリック聖地を事例として | 木村勝彦        |
| 367 | 2011 | 身延山巡拝記に記された寺院・霊跡の比較           | 望月真澄        |
| 367 | 2011 | 四国遍路の目的意識—澄禅『四国辺路日記』と現在との比較   | 柴谷宗叔        |
| 371 | 2012 | 聖地の観光資源化による沖縄表象の創出            | 塩月亮子        |
| 371 | 2012 | 二大霊場巡拝者の実態—四国と西国を比較して         | 柴谷宗叔        |
| 371 | 2012 | 四国遍路のグローバル化に関する一考察            | 浅川泰宏        |
| 371 | 2012 | 巡礼者の定義をめぐる差異の所在—イード&サルノウ後の展開  | 土井清美        |
| 371 | 2012 | 現代の聖地にみる「癒し」と「蘇り」—熊野セラピーを事例に  | 天田顕徳        |
| 371 | 2012 | 観光地としての聖地—ブラジル世界救世教の聖地ガラピランガ  | 松岡秀明        |

|     |      |                               |                               |
|-----|------|-------------------------------|-------------------------------|
| 371 | 2012 | 聖なる観光地—宗教ツーリズム論からみたパワースポット    | 岡本亮輔                          |
| 371 | 2012 | 新しい巡礼の創出—長崎カトリック教会群の世界遺産化     | 山中 弘                          |
| 371 | 2012 | 九曜信仰と聖地巡礼—南インド、タミル・ナードゥ州の事例から | 飯塚真弓                          |
| 375 | 2013 | 現代の霊場における供養の実態—四萬部寺・八葉寺の事例から  | 徳野崇行                          |
| 375 | 2013 | 法華山—乗寺巡礼札からみる西国巡礼者の出身地域について   | 幡鎌一弘                          |
| 375 | 2013 | 江戸時代前期の遍路道再現—澄禪『四国辺路日記』を中心に   | 柴谷宗叔                          |
| 375 | 2013 | 琉球王朝における植物のシンボリズムと聖地          | 平良 直                          |
| 375 | 2013 | 沖縄の御嶽と年中行事に関する一考察—南城市玉城を中心に   | ヒュウエンドリン<br>・ファン・デル・<br>フォルスト |
| 375 | 2013 | 霊場の意味付と顕在化する「違和感」—災害後の熊野を事例に  | 天田顕徳                          |
| 87別 | 2014 | 漁業者の寺社参拝習俗から見た講—三重県南部の事例から    | 高木大祐                          |
| 87別 | 2014 | 信仰・文化・ノスタルジー—筑波山の窟をめぐる人々      | 天田顕徳                          |
| 87別 | 2014 | 女性と「聖域」をめぐる言説の変容に関する一考察       | 小林奈央子                         |
| 87別 | 2014 | 鎌倉時代における僧徒の参宮と神道説の形成          | 伊藤 聡                          |
| 87別 | 2014 | 伊勢参宮と神宮の聖地性—宮域と町と参宮者の信仰と意識    | 櫻井治男                          |
| 87別 | 2014 | “Implicit Religion” 概念の展開     | 今井信治                          |
| 87別 | 2014 | 地域振興と聖地戦略—青森県新郷村キリストの墓の事例     | 岡本亮輔                          |
| 87別 | 2014 | 長崎教会群の世界遺産化とカクレキリシタン集落        | デラコルダ川<br>島・ティンカ              |
| 87別 | 2014 | パラオ諸島における慰霊巡拝の展開と慰霊碑          | 中山 郁                          |

☆は論文

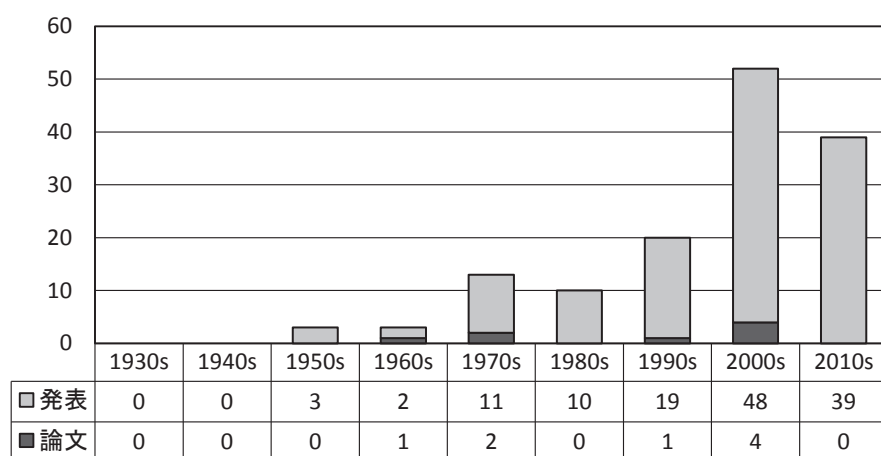


図1 日本宗教学会における巡礼研究の論文と学会発表数の推移 (1930-2014)

件という結果になり、1990年代（学会発表19件、論文掲載1件）を大幅に上回る業績を積み上げた。

2010年代においても、日本宗教学会の巡礼研究の活況状況の継続が確認できる。2010～2013年の4年間ですでに39件（9.75件／年）の発表件数があるが、これは2000年代の48件（4.8件／年）の2倍以上と、大幅に上回るペースである。内容については、とくに（A）ツーリズム／文化遺産系のますますの進展が認められる。

ツーリズム／文化遺産系の巡礼研究が隆盛する転換点となったのが、2006年の日本宗教学会第65回学術大会におけるパネル発表「宗教とツーリズム—聖なるものの「現在」をめぐる」であろう。同パネルの主催者であった山中弘は、翌2007年の「宗教と社会」学会第15回学術大会でも、テーマセッション「ツーリズム・聖地・巡礼」を行い、プロジェクト研究として「宗教とツーリズム」研究会を発足させた。その後も、2011年の日本宗教学会第69回学術大会におけるパネル発表「『聖地・巡礼』と『ツーリズム』をめぐる」など積極的な共同研究を行い、一連の成果を山中編<sup>3)</sup>『宗教とツーリズム』（世界思想社）、星野・山中・岡本編<sup>4)</sup>『聖地巡礼ツーリズム』（弘文堂）の公刊に結実させた。

巡礼は少なくとも第一義的には、聖地をめぐる宗教的实践として理解されてきた。その意味では、宗教学は巡礼研究の中心的担い手のひとつと考えられる。筆者が宗教学における巡礼研究の動向に注目する理由もここにある。かつての宗教学系巡礼研究は、巡礼がいかなる信仰に根ざしているのかを問い、それが観察可能な場所として聖地に目を向けた。これに対し、巡礼がむしろ宗教以外の領域、とりわけツーリズムと結びつけられるようになったのが近年の宗教学的巡礼研究の特徴といえる。

## Ⅱ. 巡礼の空間的再考—田中智彦の「発展的経路」

このような巡礼とツーリズムの今日的な融合状況を先取りする視点をもっていた研究者として、田中智彦があげられる。

地理学者である田中は、日本宗教学会での学会発表や論文掲載はないが、宗教学の隣接分野である宗教地理学においては、1980年代前後の中心的人物とされる<sup>5)</sup>。筆者の整理では、日本史の新城常三<sup>6)</sup>、社会学の前田卓<sup>7)</sup>、宗教学の星野英紀<sup>8)</sup>、民俗学の真野俊和<sup>9)</sup>ら、各分野の先駆者的役割を果たし、1960年代～1980年代初期にまとめた業績を上梓した「第1世代」の後に登場した「第2世代」に位置づけられる<sup>10)</sup>。第1世代の研究は、四国遍路や西国巡礼などの比較的有名な巡礼を対象とし、巡礼を宗教的实践と理解するオーソドクスな巡礼理解に立脚し、巡礼路よりも聖地に注目する傾向があった。これに対し、田中や小嶋博巳ら第2世代の研究者は、西国巡礼の三十三度行者のように巡礼を行い続ける存在や、六十六部廻国巡礼のように巡礼路が不確定なもの、あるいは写し巡礼や地域的巡礼など、それまで見過ごされてきたような事例に注目するなど、巡礼の「周辺の」な研究対象の発掘や、丹念な実証研究の積み重ねによって、第1世代の巡礼概念や研究の枠組みの批判的再考を行い、巡礼概念を広げていく視点を共有していた。田中や小嶋らが立ち上げ、地理学、歴史学、民俗学などの各分野で巡礼に関心をもつ研究者が集った「巡礼研究会」は、第2世代の巡礼研究の象徴的存在といえるだろう。

なかでも田中は、巡礼の「空間」を実践的な視点から再考した。巡礼には、聖地、巡礼者、巡礼路の三要素が必要であるとする田中<sup>11)</sup>は、とりわけ巡礼者の視点を重視し、当事者の実践から立ち上がる実際的な経路に着目した。このような関心のもと、案内記や



道中記、町石などから巡礼路を「復元」するという作業のなかから提示されたのが、巡礼路の「基本的経路」と「発展的経路」という分析概念である。

田中<sup>12)</sup>によれば、基本的経路とは西国巡礼のような複数聖地巡礼において札所を順番かつ直接的に最短距離でつなぐことで自ずと固定される経路である。いわば理念的な経路と言えよう。これに対し、発展的経路とは、基本的経路から分岐して、名所旧跡や沿道の著名社寺に参拝したり、危険な部分を回避したりする経路と説明される。

田中が発見した発展的経路の代表的なものに、西国巡礼の4番榎尾寺から5番葛井寺への「大坂廻り」がある。4番から5番への基本的経路は、「順礼街道」と呼ばれた7里の巡礼路である。これに対して、13里32町とはるかに遠回りでありながら、住吉大社や四天王寺といった西国巡礼の札所以外の有名寺社を参拝し、堺で特産品の刃物を土産物として購入し、芝居や遊女小屋などを含めた大坂見物を果たすための発展的経路が、むしろ案内記で詳しく紹介され、近世を通じて巡礼者に選択されたルートであったという<sup>13)</sup>。

つまり、田中の発展的経路から見えてくるのは、札所を巡拝しつつも、時にそれ以外の社寺にも参詣し、市中見物をし、国元への土産物を買求める巡礼者の姿である。彼は、巡礼路を巡礼者自身の実践から立ち上がる「生きられた空間」あるいは「歩かれた空間」として捉え直すことで、「物見遊山的要素を達成するための経路」<sup>14)</sup>を見だし、とくに東国からの巡礼者の「西国巡礼を核としながらも、ただ札所を巡るだけではなく、多数の社寺参詣などを取り込んだ、壮大な旅の体系」<sup>15)</sup>を描き出そうと試みた。このような田中の試みは、地誌学的な興味を示し、「各地に出かけると、趣味と研究を兼ねて必ず郷土料理と地酒を試し、名産品を土産として購入する」<sup>16)</sup>と夫人が語る彼の研究スタイルが生

み出したものともいえよう。

2002年12月に田中が急逝して10年余りが過ぎた現在、改めて彼の業績を振り返るとき、西国巡礼路の復元という1980年代に発表された一連の業績<sup>17)</sup>のなかで、「発展的経路」という概念を通して、巡礼とツーリズムとの今日的な融合状況を取り出す視点を有していた研究者であったと評価されるのではないだろうか。

### Ⅲ. 巡礼の時間的再考—「聖年」周期的・定期的な祝祭状況

田中の発展的経路は、巡礼概念の空間的再考から導き出されたものであり、巡礼者の実際的な行為によって刻まれた足跡の集合を道として復元したものであった。ここで巡礼が旅であり、移動であることに立ち返ると、もうひとつ時間の問題が浮上する。ターナー<sup>18)</sup>の巡礼コミュニティ論や、星野英紀<sup>19)</sup>の巡礼定義は、巡礼者が日常の時空間を逸脱し、聖性に近接することで、いかなる変化が生じるのかという、時間に伴う変容に注目した研究である。近年ではリーダー<sup>20)</sup>が巡礼時間を一時的なものから永続的なものと捉え直す新たな視点を打ち出している。

これらは巡礼者、あるいは巡礼行の時間に着目したものと言えるが、巡礼全体についてはどうだろう。ここで筆者が近年注目しているのが、いくつかの巡礼において、定期的あるいは周期的な祝祭的状況が醸成されることである。

たとえば、四国遍路の場合、伝統的に春や秋の農閑期に巡礼者が増えるという季節性が指摘されてきた。そもそも「遍路」という言葉自体が、俳諧では春の季語となっている。また、閏年に逆打ちを行うと御利益が増えるという信仰があり、逆打ちの出発点となる讃岐の霊場23ヶ寺では、そのアピールが行われる。こちらは4年に一度の祝祭性といえよう。

百観音巡礼のひとつ、秩父34ヶ所巡礼で

は、午歳に総開帳が行われるため、12年周期で巡礼者が激増することが、佐藤久光<sup>20)</sup>の調査によって明らかになっている。直近の午歳である2014年においても、3月1日から11月18日まで全ての札所で本尊の開帳が実施された。本尊と結縁できる善の綱や角塔婆の設置、納経帳への記念スタンプの押印、散華シールの配布などが実施され、土日休日を中心に各札所では、納経待ちの行列ができるなどの賑わいが確認できた<sup>22)</sup>。そのほか、数え7年に一度（丑年と未年）、前立本尊の開帳が行われる長野県の善光寺や、20年に一度、遷宮が行われる伊勢神宮も、独自の周期的祝祭性を持つ聖地といえる。

海外の巡礼地も同様である。イスラームの聖地メッカの大巡礼（ハッジ）は、イスラーム暦の巡礼の月に行われ、世界中から数百万ともいわれる巡礼者を集める。相当に大規模な季節的祝祭性といえるだろう。キリスト教のローマ巡礼は25年ごとに特別の赦しを与えられ、当該の年を「聖年（Holy Year）」と呼ぶ。サンティアゴ・デ・コンポステーラは、7月25日が聖ヤコブの記念日である。毎年記念行事が行われるが、この日が日曜日にあたる年は「聖ヤコブの年」とされ、普段は閉鎖されている聖なる門が開かれるなど、巡礼者が激増する。閏年が存在するため、規則的な7年周期とはならず、6年、5年、6年、11年という不規則な周期性を持ち、近年では1993年、1999年、2004年、2010年、2021年が該当する。

以上のことを整理すると、巡礼の定期的な祝祭性には、まず①季節的祝祭性と、②周期的祝祭性があげられる。①は一年のうちで特定の時期に行われるもので、年中行事的なものともいえる。四国の春遍路やメッカのハッジが該当する。②は複数年に一度の周期でめぐってくるものである。秩父の午歳総開帳、善光寺の前立本尊開帳、伊勢神宮の遷宮、ローマの聖年は規則的な周期性を、サンティ

アゴ・デ・コンポステーラの聖ヤコブの年は不規則的な周期性を持つといえるだろう。

さらに③記念碑的祝祭性というべきものがある。近年の例としては、2014年の四国霊場開創1200年記念事業や、2008年の西国三十三所花山院1000周忌結縁総開帳があげられる。前者は空海が四国霊場を巡錫したとされる815（弘仁6）年から、後者は西国巡礼を中興したとされる花山院が崩御した1008（寛弘5）年から、それぞれ、1200年、1000年の節目の年にあたることを記念したものである。②との違いは、聖地の創造や聖人の活動など、巡礼の「神話的時間」が参照され、始原からの時間を積み重ねた100年あるいは1000年という長大な時間軸に沿って、巡礼の「歴史」や「伝承」が語り直される点である。②が環状の③が線状の時間意識に立脚するといってもよい。巡礼者にとって、ともすれば一生に一度しか巡り会えないという希少性と、いままさに歴史の節目にあるという同時代性が強く意識される点でも、きわめて興味深い。

筆者はとりわけ③を、ローマ巡礼の概念を流用して、「聖年（Memorial Year）」と捉え、四国霊場開創1200年を主な対象として研究を進めている。ここまでの調査でも、今回の記念事業では、納経帳への記念スタンプの捺印や記念御影の配布、四国外での出開帳やお砂踏みや記念法要などの（あ）霊場会を主体とするもの、各札所の本尊や弘法大師像の御開帳などの（い）それぞれの札所寺院の独自のもの、さらに四国四県の県立博物館・美術館で開催された「四国へんろ展」や、NHK四国4局の共同キャンペーン「四国遍路1200」などの（う）メディアや行政、文化・教育機関、観光業界が主催・協賛する関連企画があり、宗教組織のみならず多様なアクターを巻き込んだ総合的運動体として展開したことを確認した。

巡礼の周期的祝祭性への着目は、儀礼のプロセスにおいて祝祭的状況が現出するとい



うE.リーチの儀礼論を取り込んだ青木保<sup>23)</sup>や黒田悦子<sup>24)</sup>の巡礼理解<sup>25)</sup>の発展系に位置づけられる。とりわけ記念碑的な「聖年」においては、巡礼に関する文化や民俗、宗教的言説が、長大な時間軸に沿ってパワフルに再構成されるダイナミズムが注目される。四国遍路の開創1200年記念事業においても、それぞれの札所が護持してきた仏像を開帳することで、あらためて札所寺院は確かな歴史の積み重ねを持つことが明らかにされた。このことが、さらに体系的に開示されたのが『四国へんろ展』である。近年の四国遍路研究の成果を取り込み、札所寺院や高野山の寺宝を取りそろえた本展示は、皮肉なことに、四国遍路開創1200年の根拠である空海が弘仁6年に四国霊場を開いたということを立証する資料はなく、このことが少なくとも現時点では、歴史的根拠に乏しい「神話」であることを浮き彫りにする。他方で、ひとつひとつの資料は、四国遍路の歴史を立体的に再構築し、四国遍路がめざす世界遺産登録の基盤となる文化的価値を下支えするものとなっている。

筆者<sup>26)</sup>は、巡礼研究の今後クローズアップされる問題系として、①聖地創造論／再生論、②巡礼体験論、③巡礼資源論の3つを提示したが、「聖年」は特に①と関連が強いといえよう。それは田中の巡礼の実際の側面からの問い直しと、巡礼と観光の融合状況への着目を継承しつつ、あらたに「時間」という切り口で捕らえ直す試みであると考えている。

#### IV. 巡礼の「創造」とその学問的課題

以上、本稿では(1)日本宗教学会における巡礼研究の動向から、2000年代以降、とりわけツーリズム系の巡礼研究の隆盛が確認できること、(2)今日のツーリズム系巡礼研究の先駆的業績として、田中智彦の「発展的経路」があげられること、(3)田中が行った巡礼の空間的再考に対して、時間的視点からの

再考として巡礼の周期的祝祭性に注目した「聖年」に関する問題系が提示できることを述べた。巡礼が地域振興やツーリズムなどの文脈と結びつきながら、再生、創造、再創造される状況は各地でみられるようになり、研究業績の蓄積も急速に進んでいる。列挙すると、浅川<sup>27)</sup>、板井<sup>28)</sup>、岡本<sup>29)</sup>、高木<sup>30)</sup>、松井<sup>31)</sup>、森<sup>32)</sup>などがあげられる。

こうした方向性の延長上には、研究者自身も巡礼の「再生」や「創造」に、時に積極的に関与したり、要請されたりという状況が浮かび上がる。伊勢神宮で障害を抱えた巡礼者を支援する「バリアフリー巡礼」の研究を行う板井<sup>33)</sup>は、みずからNPO法人を主催する実践者の側面ももつ。板井は、伊勢神宮の石段や玉砂利などが車いすの障壁となる一方で、「伊勢らしさ」を醸し出す重要な要素でもあるという両面性を指摘し、その両者のバランスが「バリアフリー巡礼」の課題として指摘する。このことは、研究者が巡礼の分析者であり、かつ提供者であるという二重性を持つ立場に立つことを示すものである。

研究者の積極的な社会貢献が求められる、昨今の大学・研究機関が置かれている状況を鑑みるならば、研究者と研究対象との距離は、今後ますます接近し、緊密化することが予想される。研究者が研究対象との間にどういった距離を設定するのかという、古くて新しい学問的、倫理的課題への応答が、改めて求められる。

(埼玉県立大学)

#### 〔注〕

- 1) 浅川泰宏『巡礼の文化人類学的研究—四国遍路の接待文化』古今書院、2008、28-32頁。
- 2) 浅川泰宏「最近の遍路・巡礼研究の動向と特徴」「四国遍路と世界の巡礼」研究会編『第1回四国地域史研究大会 公開シンポジウム・研究集会プロシーディングズ』2009、

- 8-19頁。
- 3) 山中 弘編『宗教とツーリズム—聖なるものの変容と持続』世界思想社, 2012。
  - 4) 星野英紀・山中 弘・岡本亮輔編『聖地巡礼ツーリズム』弘文堂, 2012。
  - 5) 小田匡保「戦後日本の宗教地理学(続)一宗教地理学文献目録の分析と通じて」駒澤地理50, 2014, 57頁。
  - 6) 新城常三『社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房, 1964。
  - 7) 前田 卓『巡礼の社会学』ミネルヴァ書房, 1971。
  - 8) 星野英紀『巡礼—聖と俗の現象学』講談社, 1981。
  - 9) 真野俊和『旅の中の宗教』日本放送出版協会, 1980。
  - 10) 前掲1) 214-217頁。
  - 11) 田中智彦『聖地を巡る人と道』岩田書院, 2004, 7頁。
  - 12) 前掲11) 21頁。
  - 13) 前掲11) 87-100頁。
  - 14) 前掲11) 98頁。
  - 15) 前掲11) 101頁。
  - 16) 田中一美「関東べいの守貞漫稿—あとがきにかえて」(前掲11), 365頁。
  - 17) 田中の西国巡礼路の復元に関する研究は, 「愛宕越えと東国の巡礼者—西国巡礼路の復元」人文地理39-6, 1987, 66-79頁, 「石山より逆打と東国の巡礼者—西国巡礼路の復元」神戸大学文学部紀要15, 1988, 1-23頁, 「大坂廻りと東国の巡礼者—西国巡礼路の復元」歴史地理学142, 1988, 1-15頁があり, いずれも1985年に神戸大学に提出された博士論文「西国巡礼路の復元に関する研究」を構成する論文である。
  - 18) Turner, V. *Image and Pilgrimage in Christian Culture: Anthropological Perspectives*, Columbia University Press, 1995。
  - 19) 星野英紀『四国遍路の宗教学的的研究—その構造と近現代の展開』法蔵館, 2001年。
  - 20) Reader, I. *Making Pilgrimages: Meaning and Practice in Shikoku*, University of Hawaii Press, 2006。
  - 21) 佐藤久光『遍路と巡礼の社会学』古今書院, 2004, 147頁。
  - 22) 筆者の調査による。筆者はこれまで秩父と四国を複数回巡った経験を持つが, 四国では納経所で並ぶのが普通であるが, 秩父は平常時であれば, まずそのようなことはない。だが, 2014年の総開帳期間中の混雑時には, 納経に20~30分待ちという状況も発生していた。
  - 23) 青木 保「現代巡礼論の試み—御嶽登拝を中心として」『境界の時間』岩波書店, 1985, 109-174頁。
  - 24) 黒田悦子『フィエスター中米の祭りと芸能』平凡社, 1988。
  - 25) 前掲1) 37-38頁。
  - 26) 前掲2) 15頁。
  - 27) 浅川泰宏「道をブリコラージュする—四国遍路の巡礼路再生運動」(山中弘編『宗教とツーリズム—聖なるものの変容と持続』世界思想社, 2012), 149-169頁。
  - 28) 板井正斉『ささえあいの神道文化』弘文堂, 2011。
  - 29) 岡本 健『n次創作観光—アニメ聖地巡礼／コンテンツツーリズム／観光社会学の可能性』NPO法人北海道冒険芸術社, 2013。
  - 30) 高木秀和「南信州・遠山郷における歴史的文化的資源の活用—「神様王国」づくりを事例に」歴史地理学55-1, 2013, 29-42頁。
  - 31) 松井圭介「ヘリテージ化される聖地と場所の商品化」(山中弘編『宗教とツーリズム—聖なるものの変容と持続』世界思想社, 2012), 192-214頁。
  - 32) 森 正人「場所の真正性と神聖性—高知県室戸市の御厨人窟を事例に」地理科学56-4, 2001, 42-61頁。
  - 33) 前掲28)。

# 霊山登拝の旅日記に人生儀礼を読む

—富士山を中心にして—

西 海 賢 二

- I. はじめに
- II. 富士山と富士講
- III. 『富士道中小遣覚帳』に通過儀礼を読む
- IV. おわりに

## I. はじめに

2013 (平成25) 年 6 月, 富士山 (信仰の対象と芸術の源泉=富士講・信仰習俗・造形) が世界文化遺産になったことを心のどこかで喜んでいる日本人は多い。しかしその反面, 今後富士山の文化 (無形文化) が消滅していくのではという危機感をもっている人も少なからずいる。私もその 1 人である。本報告では 1855 (安政 2) 年 7 月 20 日より 8 月 2 日までの『富士道中小遣覚帳』(筆者蔵) から上野国の若者たちの通過儀礼などを紹介しつつ, 富士山をめぐる庶民文化を考えてみたい。

山伏の真似事をはじめて 40 年余り, 筆者が「法螺を吹きつつ」先達をし, いざ「六根清浄」。あわせて日本の歴史上きわめて眉唾的で歴史の舞台では過小評価されている富士導者 (修験者) たちのしたたかに生きた世界を「民間信仰としての人生儀礼」との関わりで紹介する。

## II. 富士山と富士講

近世初頭頃より, 富士の行者によってはじめられ, とくに 1733 (享保 18) 年 6 月に食行

身祿 (じきぎょうみろく) が富士山の 7 合 5 勺において入定を行ったことを契機にして, その後, 江戸市中を中心に組織された富士信仰を母胎とする集団を富士講と称している。

古代, 中世のいわゆる修験者の苦行を重ねる「行」を中心とした山岳信仰から近世山岳信仰の形態は大きく様変わりして, 一般俗人が自由に登拝するようになったことで, それが人々に代参講を簇生させる結果ともなった<sup>1)</sup>。

日本の山の象徴的存在で在り続ける富士山 (3,776m) は, いつでも庶民信仰の対象となった。とくに関東農村を中心に富士講の結成をみたのをはじめ, 江戸市中では, 江戸時代中期以降, 八百八講と称されるほどの爆発的な富士講の結成がみられ (図 1~3), これと連動して 18 世紀中葉以降には, 小型模型としての富士山である富士塚が多数築かれた<sup>2)</sup>。

この富士塚に富士登拝のできない老若男女が多数登拝して, 富士登山をしたのと同じ御利益を求められるとされていた。しかし, 富士講はとくに江戸中期以降に爆発的な人気を博したものの, 江戸幕府より富士講という集団が拡大することを危険とみなされ, 1740 年以降幕府は 5 回にわたって, 富士講の結成を弾圧することがあった。それでも, 富士講は地下に潜伏するなどして身祿行者以後の『三十一日の巻』などに代表される教理が整

---

キーワード: 富士山, 世界文化遺産, 人生儀礼, 富士塚, 同行

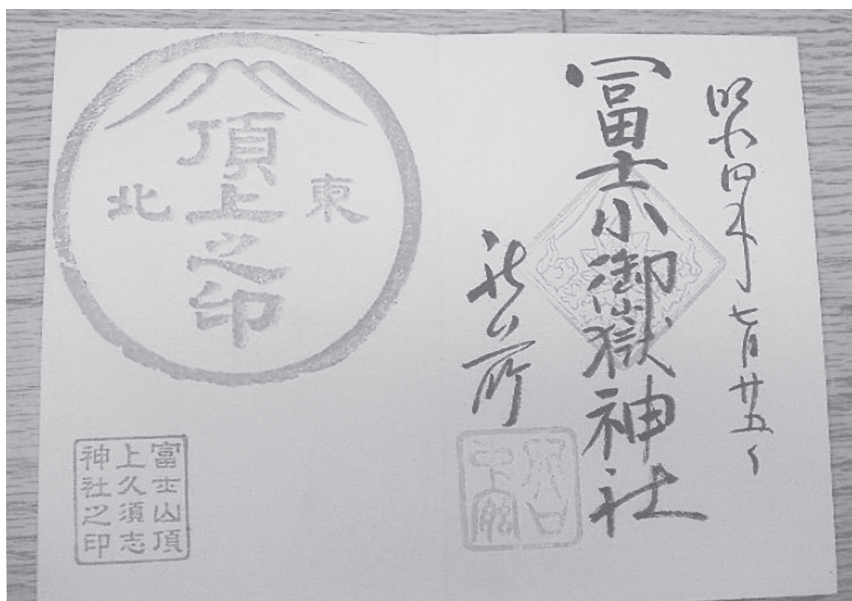


図1 昭和4(1929)年7月25日 富士小御嶽神社納経  
(文京区ふるさと歴史館蔵)

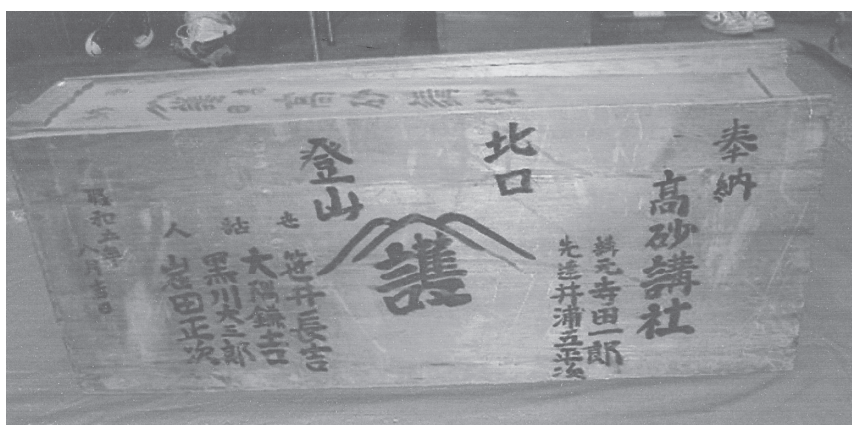


図2 昭和5(1930)年 高砂講社(富士講)の祭具保管箱  
(文京区ふるさと歴史館蔵)

理されつつ発展し、武蔵国鳩ヶ谷宿(埼玉県鳩ヶ谷市)には小谷三志による「不二道」などが創設された。

不二道の基本精神には男女平等があり、他にやや遅れて創出されていた天理教(奈良県天理市・1838年中山みきによる開教)・金

光教(岡山県浅口市金光町・1859年赤沢文治郎により開教)などとは性格を異にしていた。この男女平等の精神的核になったのは、身祿行者の娘ハナを後継者に選出していることなど、女の穢れといった当時の常識を否定した面があったことを見出すことができる。



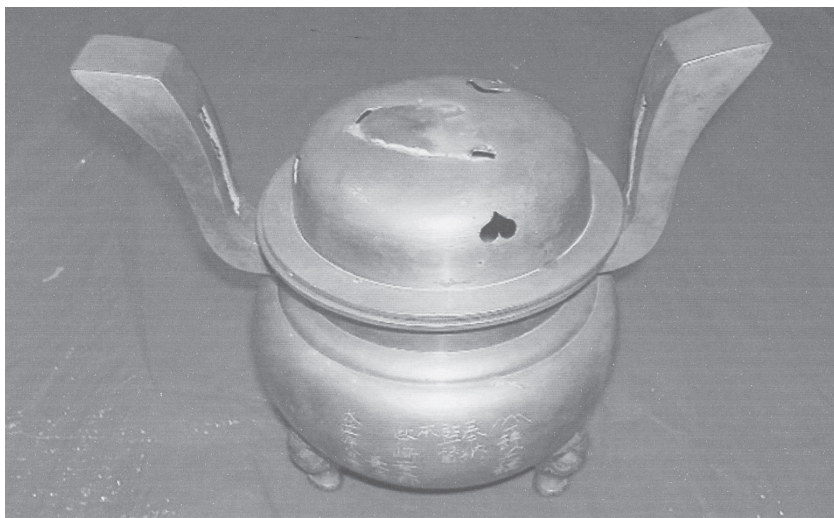


図3 文京区内の講中が保管する富士講の祭具

これをもとに明治以後、扶桑教・実行教・丸山教などの神道教派が江戸時代以来の富士講を母胎にしつつ再編成されていった。

しかし、近代の国家神道の名のもと富士講は扶桑教などに半ば軒先を借りるような信仰形態が展開していった。そのため大がかりな祈禱や梵天は姿を消したが、白装束で六根清浄を唱えながらの集団登拝をする姿は今日も伝えられている。また、江戸市中に多くの富士塚が築かれたが近年の宅地造成や道路の開削などの地域開発によって富士塚が破損もしくは消滅（東京都北区十条富士塚・葛飾区南水元富士塚）する所が多く、文化財の立場からもかつ今回の世界文化遺産に関わる条件の一つである「富士塚」の保護などと絡めた問題が生じている。

それでも、なかにはこの富士塚に毎年のお山開き（7月1日）に講中による集団登拝をする習俗が東京でも数か所確認されている。

現在、富士登山を行う講は少なくなり、月拝みやお焚きあげを行う講は減少の一途を辿っている。また、吉田口・北口・喜多口（山梨県富士吉田市）・須走・東口（静岡県駿

東郡小山町）などの富士登山口で富士講を対象に宿坊（民宿）経営を行っている御師（おし）も近年に至って激減している。

### Ⅲ.『富士道中小遣覚帳』に通過儀礼を読む

富士講の面々の修行は、毎年、旧暦7月22日より8月2日まで山籠もりをし、3日に駆け越して、東口（須走）に下り東側の麓の各地をめぐる。登山道は全行程を十合に分け、一合目ごとに石室（山小屋）を設けていた。登拝習俗は宝冠をかぶり、木綿袈裟に白衣を着て金剛杖（図4）を携えるものであった。

近年の道中日記研究は歴史学や地理学からのアプローチが顕著であり、さらにこれまでの研究の多くは、新城常三<sup>3)</sup>に代表される社会経済史的側面からの道中日記の数量分析や、歴史地理学の小野寺淳<sup>4)</sup>、田中智彦<sup>5)</sup>らの道中の経路分析を中心になされたものがほとんどであったが、1990年代以降になると特に観光地域史を標榜した研究が社会史研究の延長線上で進められるものが多くなり、歴史学から青柳周一<sup>6)</sup>や原淳一郎<sup>7)</sup>らの研究があ



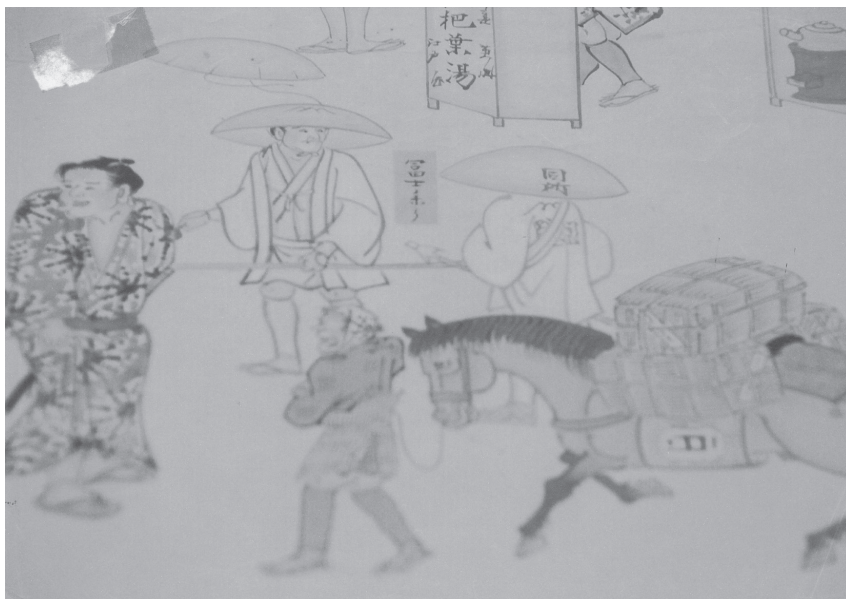


図4 江戸市中の富士参り  
(元江戸東京博物館教授 小澤弘氏提供による)

り飛躍的な展開を見せている。

さらに特徴的なのは、参詣路の復元研究の多くが伊勢参宮に集中してきたことである。なかでも山本光正<sup>8)</sup>や櫻井邦夫<sup>9)</sup>などである。

今回紹介する山岳信仰に関連した史料と伝承をめぐる参詣経路の研究は岩鼻通明<sup>10)</sup>や田中智彦<sup>11)</sup>をはじめとして山岳考古学からの時枝務<sup>12)</sup>などが見られるものの、富士山参詣に関連するものは見当たらないのが現状であるため紹介することとする。

以下に紹介する『富士道中小遣覚帳』は上野国邑楽郡狸塚村（現・群馬県邑楽郡邑楽町狸塚）の出井家に所蔵されていたものだが、現在は筆者が所蔵しているものである（図5）。史料には富士山参拝をめぐる上野国から参詣ルートを知るだけでなく、その行間から登拝に関わる興味深い人生儀礼をはじめ参詣道に見られる沿道住民との関わりなども知ることができるものである。

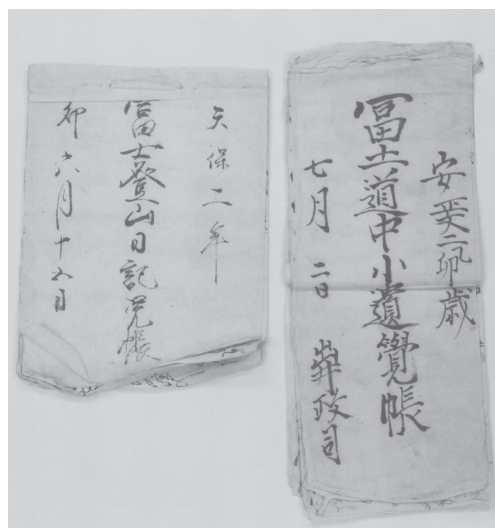


図5 富士道中小遣覚帳および富士登山日記覚帳  
(筆者所蔵)

「 安政二乙卯歳  
富士道中小遣覚帳  
七月二日 出井政司 」  
縦9.7cm・横24.1cm 袋綴（筆者蔵）

七月三日 出立

|         |                |
|---------|----------------|
| 一 拾五文   | べき祝            |
| 一 四拾八文  | 参銭             |
| 一 参拾貳文  | 中食にしめ          |
| 一 八文    | 梅干             |
| 一 拾六文   | 佐川渡シ<br>舟ちん    |
| 一 四文    | すみ             |
| 一 三十文   | 砂とう            |
| 一 四拾文   | 利根川渡シ<br>舟ちん   |
| 一 四拾八文  | 醬中             |
| 一 百七拾貳文 | 新郷柳屋<br>泊り藤助   |
| ㇼ四百十五文  |                |
| 同 四日    |                |
| 一 四拾文   | 新川渡シちん<br>三ヶ所休 |
| 一 六文    |                |
| 一 八文    | かんおん札代         |
| 一 八文    | かんおん札代         |
| 一 拾文    | かんおんやすみ        |
| 同       |                |
| 一 六十八文  | 松山宿籠や<br>中食    |
| 同       |                |
| 一 七文    | 御札代            |
| 同       |                |
| 一 貳十文   | とき川<br>舟せん     |
| 同       |                |
| 一 五文    | やすみ            |
| 同       |                |
| 一 貳拾四文  | だちん            |

|         |                  |
|---------|------------------|
| 一 百七十貳文 | 高萩亀屋兵七<br>泊りせん   |
| ㇼ三百六十八文 |                  |
| 五日      |                  |
| 一 十六文   | 入間川渡シ<br>舟ちん     |
| 同       |                  |
| 一 六文    | 扇町休              |
| 同       |                  |
| 一 四文    | 橋せん              |
| 同       |                  |
| 一 十一文   | 灰嶋<br>やすみ        |
| 同       |                  |
| 一 廿八文   | 中食               |
| 同       |                  |
| 一 八文    | 八玉寺<br>休         |
| 同       |                  |
| 一       | 休                |
| 同       |                  |
| 一 廿八文   | わらぢ<br>壺足        |
| 同       |                  |
| 一 廿四文   | 小間木の<br>浦番所      |
| 一 十六文   | 御ちや<br>休         |
| 同       |                  |
| 一 十貳文   | 高尾山札             |
| 同       |                  |
| 一 七拾貳文  | 道普請<br>番人        |
| 同       |                  |
| 一 廿四文   | 玉川渡シ<br>舟せん      |
| 同       |                  |
| 一 廿四文   | 白砂糖              |
| 同       |                  |
| 一 百八十文  | 小佛峠泊り<br>武さしや権次郎 |

|          |       |       |      |          |         |
|----------|-------|-------|------|----------|---------|
| ノ 五百八文   |       | 一     | 三十式文 | ろうそく     |         |
| 六日       |       |       |      | かつて手びき   |         |
| 一        | 式十文   | 二瀬川   | 一    | 拾式文      | はらい     |
|          |       | 舟ちん   |      | ノ 壺貫八十三文 |         |
|          | 同 百文  | 上野原   |      | 三十六文     | たすき判代   |
|          |       | 中食代   |      | 七日七時より   |         |
|          | 同     |       | 一    | 六十四文     | 安さん守    |
| 一        | 五十文   | 道普請   | 一    | 廿八文      | わらち代    |
|          | 同     |       | 一    | 九文       | 道つくり    |
| 一        | 六十式文  | 鶴川    | 一    | 十式文      | 小札      |
|          |       | うね越ちん | 一    | 十三文      | 茶代      |
|          | 同     |       | 一    | 十式文      | 父胎内     |
| 一        | 六十式文  | 鳥沢    |      |          | 参銭      |
|          |       | 休     | 一    | 十式文      | 母胎内     |
|          | 同     |       |      | 五 文      | 馬返し茶代   |
| 一        | 式百十六文 | 大月宿   | 一    | 式十四文     | 夕飯茶代    |
|          |       | 丸木屋   | 一    | 拾式文      | 本社修復代   |
|          |       | 久兵衛   | 一    | 四十文      | 上廻り参銭仕切 |
| ノ 四百八十式文 |       |       | 一    | 百文       | 五合五勺目   |
| 外 十六文    |       | 酒代    |      |          | 泊り茶代    |
| 惣ノ 五百式文  |       |       |      |          | 定式      |
| 七日       |       |       | 一    | 廿四文      | 小御嶽礼参物  |
| 上文司様     |       |       | 一    | 廿四文      | ろうそく壺丁  |
| 一        | 六十文   | 小札二十枚 | 一    | 廿四文      | 一合目より一神 |
| 一        | 十式枚   | 大札一枚  |      |          | 迄道つくり代  |
| 一        | 三十六文  | たすき   | 一    | 拾式文      | 拝殿かんけ   |
| 一        | 四十八文  | 杖一本   | 一    | 四拾八文     | 案内人酒代   |
| 一        | 百式十式文 | 御山役料  | 一    | 廿四文      | 八合目茶代   |
| 一        | 百文    | 綿入損料  | 一    | 式百文      | 御八龍廻り参詣 |
| 一        | 四十八文  | 弁当夜飯  |      |          | 道つくり    |
| 一        | 六十四文  | 餅代    | 一    | 拾六文      | 茶菓子     |
| 一        | 百文    | 山案内強力 | 一    | 十式文      | 薬師札     |
| 一        | 式十四文  | わらぢ   | 一    | 十五文      | 御籤参銭代   |
| 一        | 三百文   | 献上物   | 一    | 三十六文     | わらち壺足   |
| 一        | 廿四文   | すばしり  | 一    | 十六文      | 茶菓子代    |
|          |       | わらぢ壺足 | 一    | 式十四文     | わらぢ     |
| 一        | 十式文   | 休     | 一    | 七十式文     | 中食代     |
| 一        | 八文    | 荷附    | 一    | 十六文      | 茶菓子代    |
| 一        | 五文    | 道つくり  | 一    | 三十式文     | かみ結せん   |
| 一        | 廿八文   | 砂とう   | 一    | 百八十文     | 竹の下     |

|           |         |         |          |
|-----------|---------|---------|----------|
|           | 和泉屋     | 一 八文    | 渡シせん     |
|           | 市右衛門    | 一 三拾六文  | 渡シ舟ちん    |
| 八日晚迄      |         | 一 四十八文  | 飯山       |
| ㇼ 壺貫貳百十三文 |         |         | 中食代      |
| 九日        |         | 一 廿四文   | わらぢ      |
| 一 八文      | 休       |         | 壺足       |
| 一 三十六文    | 小田原道    | 一 廿四文   | 休        |
|           | 道了参詣山役銭 | 一 拾貳文   | 遊行寺案内    |
| 一 三十六文    | 御札代     | 一 八文    | 正中       |
| 一 十貳文     | 参銭      | 一 八文    | さつま代     |
| 一 四十八文    | 山麓若木屋中飯 | 一 八文    | 船橋せん     |
| 一 十五文     | 休右茶代    | 一 三十貳文  | 江ノ島      |
| 一 廿四文     | 茶菓子代    |         | 舟ちん      |
| 一 百廿八     | 佐川渡ちん   | 一 参百文   | 同所宿せん    |
| 一 貳百文     | 飯すみ     | 一 貳十四文  | 酒代       |
|           | 旅籠代     | ㇼ 五百七十文 |          |
| 一 貳十四文    | 寺へ茶代のう経 | 十二日     |          |
|           | 共       | 一 六十四文  | 江ノ島より    |
| ㇼ 五百四十文   |         |         | 釜倉尔かつぎ   |
| 十日        |         | 一 十六文   | 休        |
| 一 貳拾貳文    | のうきょうせん | 一 四拾八文  | ㇼ 四ヶ所長谷寺 |
| 一 拾六文     | 休茶代     |         | 田代寺 岩慶寺  |
| 一 七十貳文    | 子安宿     |         | 杵本寺      |
|           | 中食代     | 一 百文    | 江ノ島三ッ岩廻  |
| 一 百五十文    | 大山参銭    |         | り参せん     |
|           | 番人共     | 一 十六文   | 休茶代      |
|           | 道つくり    | 一 九文    | 参銭       |
| 一 三十六文    | 御札代三枚   | 一 十二文   | 長谷寺かへちや  |
| 一 拾六文     | 正中代     |         | う        |
| 一 六文      | 日向薬札    | 一 三十六文  | 百番観音おい絵  |
| 一 貳百文     | 日向西泉坊泊り |         | 代        |
|           | 旅籠代     | 一 百文    | 鎌倉       |
| ㇼ 五百貳十六文  |         |         | 中食代      |
| 外二        |         | 一 十六文   | 休        |
| 金壺兩貳分一朱也  |         | 一 十貳文   | 金沢八景     |
| 十一日       |         | 一 八文    | 此所山せん茶代  |
| 一 拾五文     | 飯山のう経さん | 一 十五文   | 八枚武州金龍現  |
|           | せん      |         | 札所       |
| 一 拾五文     | 星之谷     | 一 貳十四文  | 惣参せん     |
|           | のう経     | 一 貳百廿四文 |          |

|        |          |            |      |
|--------|----------|------------|------|
| 〆七百十弍文 | 程か谷桑屋泊り  | 一 廿四文      | わらぢ  |
|        | せん       |            | 壺足   |
| 一 拾六文  | 休 茶代     | 一 百七十八文    | 繪紙   |
| 十三日    |          |            | 三十六枚 |
| 一 拾六文  | 大師川原参せん  | 一 廿四文      | 休茶代  |
| 同      |          | 一 弍百三十弍文   | 千住泊り |
| 一 四拾八文 | 大森宿      |            | 浪花屋  |
|        | 中宿       | 〆五百八十弍文    |      |
| 同      |          | 十五日        |      |
| 一 拾六文  | 品川休      | 一 六十文      | わらぢ  |
| 同      |          |            | 三足   |
| 一 拾弍文  | 高縄       | 一 四十八文     | 中食代  |
|        | 千学寺      | 一 五十弍文     | 栗橋川  |
| 同      |          |            | 舟ちん  |
| 一 八文   | 蔵城寺      | 一 廿六文      | 休    |
|        | 参詣       | 一 廿四文      | 嶋田川  |
| 同      |          |            | 舟ちん  |
| 一 八文   | 芝神明      | 〆弍百八文      |      |
| 同      |          | 十三口〆       |      |
| 一 八文   | あたご山     | 一 七貫七百廿八文  |      |
| 同      |          | 為金壺両弍朱三百四文 |      |
| 一 六十文  | 墨筆代      | 奉納富士参詣     |      |
| 同      |          | 仕候         |      |
| 弍百文    | 菓子代      | 清右衛門       |      |
| 百文     | 紙代       | 与右衛門       |      |
|        | 此分喜多屋迄遺物 | 泰三良        |      |
| 〆五百文   |          | 政治         |      |
| 十四日    |          | 同行四人       |      |
| 一 十五文  | 浅草       |            |      |
|        | 参せん      |            |      |
|        | のうきょう代   |            |      |
| 一 十六文  | さ若町      |            |      |
|        | 芝居       |            |      |
| 一 十六文  | 上野参詣     |            |      |
| 一 三文   | しのはつ弁天   |            |      |
| 一 三文   | 湯島天      |            |      |
| 一 十五文  | 妻恋稲り     |            |      |
|        | 守参せん     |            |      |
| 一      | 神田明神参詣致  |            |      |
| 一 四拾八文 | 中食代      |            |      |

狸塚村は近世期には上州館林藩の支配下にあり、1855（安政2）年当時の村高は583石余の村であった。史料的には近世後期の「富士参詣日記」として他にも多くの存在が確認されているが、本史料の最大の特徴は冒頭に「へこ祝」の記載があることから、若者たちの通過儀礼を伴った参詣日記であるということである。

しかし、10代前半と思われる大人とも子供ともつかぬ年齢なのか、あるいは北関東という地域的な問題からか、おそらく人生はじめ



ての上野国・武蔵国・甲斐国・駿河国・相模国そして江戸という世間を知るための「富士登山紀行」であったものと思われる。

史料的には誤字や当て字が多い。しかしその反面、これが逆に4人の同行衆がこの「富士参詣」を契機にして生涯の契りを結ぶとともに村の一人前として課せられた「修行の旅」であったことを思うと、微笑ましくなる「道中記」である。

誤字（単なる記載まちがいか？）の一部を掲げてみよう。

（灰嶋）やすみ……………拝島  
（八玉寺）休……………八王子  
（玉川）渡し……………多摩川  
（釜倉）……………鎌倉  
（高縄千学寺）……………高輪泉岳寺  
（蔵城寺）……………増上寺  
（新川）……………荒川  
（佐川）……………酒匂川

などである。

上野国から富士山への日程についてみると、1855（安政2）年7月3日に狸塚村を出立して同月15日に帰村した、12泊13日の日程であった。これはいうまでもなく富士・大山の山開きをめざしたものである。さらに他の上野国から2ヶ月余の日程で行われた伊勢参宮などに見られるように、1月初旬に出立して3月の中旬に戻るものとは明らかに異なるものであった。さらに4人の同行衆が農作業の中心的な大人たちであれば、7月中に半月も家を留守にすることは農作業（田植えから1番・2番・3番の草取りなど）の関連から考えられない事で、その点からも若者たちの通過儀礼的な「富士・大山・江ノ島・江戸」の修行の伴う旅（世間を知る）であったと思われる。

参詣ルートとしては上野国を出て坂東太郎と異名をもつ利根川を渡り、松山（現・埼玉県東松山）・とき川（現・埼玉県比企郡とき

がわ町）・入間川を経て、灰嶋（現・東京都昭島市）・八玉寺（現・東京都八王子市）・高尾山（現・東京都八王子市）・上野原（現・山梨県上野原市）・大月（現・山梨県大月市）・上吉田（現・山梨県富士吉田市）の近世北口（喜多口）最大の御師であった「上文司」に立寄り、富士山頂をきわめて須走（現・静岡県駿東郡小山町）の東口に下山して、竹の下和泉屋（現・静岡県駿東郡小山町）に宿泊している。

和泉屋さんは近世を通じて、富士講の専門宿として栄えた宿屋であり、その他の東海道筋などからの江戸期の「道中日記」に度々登場している。

その後、大雄山最乗寺（一般に小田原の道了山「尊」として親しまれている曹洞宗寺院）を経て、佐川（酒匂川・小田原）を渡り、この後、同行衆は坂東の札所5番（飯泉山勝福寺・現小田原市飯泉）7番・8番（飯山観音一厚木市・星谷観音一座間市）をめぐりつつ、相模国の国御嶽である大山登拝（伊勢原市）を経て、江ノ島（藤沢市）に宿泊している。

江ノ島から釜倉（鎌倉）周辺の坂東の札所一番杉本寺をはじめとする寺院を巡拝したのち、金沢八景（横浜市金沢区）を経て、程か谷（横浜市保土ヶ谷区）に宿泊、次いで川崎大師（川崎市川崎区大師町）をお参りして、江戸に入っている。

江戸では泉岳寺・芝神明社・愛宕さん・浅草・上野・湯島・妻恋などの「江戸名所」を訪ね、その間ふるさとへの土産物として「墨」・「筆」・「繪紙」・「御守り」など、比較的荷物にならないものを大量に買い込んでいる。

富士登山の最後は千住の宿浪花屋にとり、翌15日に上野国に戻るというルートであった（図6）。



図6 富士道中小遣覚帳の参詣ルート

(ベースマップは大日本国全図、明治14年2月出版、一般財団法人情報センター提供資料による)

#### Ⅳ おわりに

以下に幕末の富士参詣日記を通して富士信仰（富士登山）に関わる記載に注目してコメントを寄せることにする。7月5日にある「一十式文 高尾札」とある記述は、単なる高尾山の札を求める以上に、とくに上野国・下野国・武蔵国方面から甲州街道を利用する富士の導者たちは、ほとんどが富士登山をする前

に高尾山参拝をしていたことが近世・近代からの文献からも確認されており、かつ現在の拝島・八王子・高尾山周辺では富士の導者から「ひっきょうひっきょう銭くれよ一文なしのやけ導者」などと「合力銭」をねだる習俗があったことも、伝承かつ高尾山麓の浅川（八王子）の石川日記にはその旨が紹介されている。

7月7日にある「一 百文 綿入損料」とは



山小屋（近世・近代では室と称している）に宿泊するときの防寒具（どてら）の使用料のことである。どてらには富士講中の山印（笠印）や講中名などが染め抜かれ、とくに北口御師のなかでも「上文司」や「大国屋」・「浅間坊」「数珠屋」などの傘下にあった「講中」などでは、自前のどてらや、薬缶・夜具などを所有していたこともあった。

同日にある「一 六十四文 餅代」も富士山中で食べる餅代だけでなく、北口の御師集落では一夏に千人以上の宿泊者を受け入れた宿坊では、導者たちを中心に「チン餅」と称される餅が振舞われたこともあり、この回数が多ければ多いほど導者にとっても地域住民にとっても一喜一憂する儀礼であったのである。そのほかにもこの史料には、多くの民俗事象を裏付けるものが散見しており、文献との相互検証を試みることが可能となるであろう。それにしても政司（政治）さんを先達役として4人の同行衆は2週間に及ぶ、村の一人前になるための儀礼として富士登山を決行し、その道すがら多くの苦行だけでなく、知見を広め、その後の村の成員としての精神を培ったものと思われ、それが冒頭にある「べき祝」（禪祝）を象徴しているようである<sup>13)</sup>。

（古橋懷古館館長）

〔注〕

- 1) 拙著『富士・大山信仰 山岳信仰と地域社会：下』岩田書院，2008。
- 2) 前掲1)
- 3) 新城常三『社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房，1964。
- 4) 小野寺淳「伊勢参宮道中日記の分析」東洋史論2，1981，1-8頁。
- 5) 田中智彦『聖地を巡る人と道』岩田書院，2004。
- 6) 青柳周一『富嶽百景－観光地域史の試み－』角川書店，2002。
- 7) 原淳一郎『近世寺社参詣の研究』思文閣出版，2007。原淳一郎『江戸の寺社めぐり 鎌倉・江ノ島・お伊勢さん』吉川弘文館，2011。
- 8) 山本光正「旅日記にみる近世の旅について」交通史研究13，1985，69-84頁。
- 9) 櫻井邦夫「近世における東北地方からの旅」駒澤史学34，1986，144-181頁。
- 10) 岩鼻通明「道中日記にみる出羽三山参詣の旅」歴史地理学139，1987，1-14頁。
- 11) 前掲5)。
- 12) 時枝務「日記史料と民俗－『大和泉日記』をめぐって－」（和田文夫先生頌寿記念論文集刊行会編『民俗と考古の世界』，2000），49-65頁。
- 13) 拙著『旅と祈りを読む』臨川書店，2014。